平安京右京三条一坊十町

—西ノ京永本町の調査—

２０１６年

古代文化調査会

平安京右京三条一坊十町

—西ノ京永本町の調査—

２０１６年

古代文化調査会

例　言

1．本書は、古代文化調査会が京都市中京区西ノ京永本町において、株式会社アーキエムズによるホテル建設に伴い実施した平安京右京三条一坊十町跡（京都市文化財保護課番号15H421）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査（記号　16NAGA）は、古代文化調査会の家崎孝治が担当した。

3．調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。

4．本書の編集・執筆は家崎がおこなった。

5．図面整理及び遺物実測、製図トレースは水谷明子が担当した。

6．本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。

7．本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の１の地図（二条駅）、国土地理院発行の25,000分の１の地図（京都北部）を調整し、使用した。

8．土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9．遺構番号は実測図・写真ともに共通している。

10．発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈　家原圭太　馬瀬智光　奥井智子　梶川敏夫　熊井亮介　熊谷　駿　熊谷舞子
黒須亜希子　鈴木久史　西森正晃　新田和央　長谷川行孝　平尾政幸　堀　大輔
松本和敏　宮原健吾　和田正二
(株)アーキエムズ　(株)明輝建設　(株)大高建設　(公財)京都市埋蔵文化財研究所

本　文　目　次

平安京右京三条一坊十町跡

Ⅰ　調査の経過…… 1

Ⅱ　遺　　構…… 5

Ⅲ　遺　　物…… 10

Ⅳ　ま　と　め…… 14

図　版　目　次

図版１　遺跡　１　調査地遠景（東から）
　　２　西半部全景（東から）
図版２　遺跡　１　建物１（東から）
　　２　土壙86（北東から）
図版３　遺跡　１　柱穴71（建物１）（北から）
　　２　柱穴84緑釉陶器出土状況（東から）
図版４　遺跡　１　柱穴114（建物１）（北から）
　　２　柱穴69（建物１）（東から）
図版５　遺跡　１　東半部遠景（北から）
　　２　東半部全景（北から）
図版６　遺跡　１　土壙120（南西から）
　　２　土壙120灰釉陶器出土状況（北西から）
図版７　遺物　柱穴84・精査中・土壙120・溝１出土遺物
図版８　遺物　柱穴89・溝７・精査中・柱穴98・柱穴71・土壙86出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図…… 1
図２　調査地位置図…… 2
図３　平安京条坊と調査地位置図…… 2
図４　四行八門と調査位置関係図…… 2
図５　北壁断面実測図…… 4
図６　東壁断面実測図…… 4
図７　遺構実測図…… 6
図８　建物１実測図…… 7
図９　柵２実測図…… 7
図10　柵３実測図…… 7
図11　柵４実測図…… 8
図12　柵５実測図…… 8
図13　柵６実測図…… 8
図14　柵７実測図…… 8
図15　柱穴84実測図…… 9
図16　柱穴89（柵６）実測図…… 9
図17　土壙120実測図 …… 9
図18　出土土器実測図……11
図19　土製品実測・拓影図……13
図20　平瓦実測・拓影図……13

平安京右京三条一坊十町跡

Ⅰ　調査の経過

調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区西ノ京永本町23番である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京右京三条一坊十町跡に当たる。2015年秋、当地にホテル建設の計画がなされた。今回の調査地は十町内の中央南辺部に位置する。当地の開発者である株式会社アーキエムズから古代文化調査会に調査の依頼があり、京都市文化財保護課の指導のもと工事に先立ち当調査会が発掘調査をおこなうことになった。調査は既存建物の解体を待って2016年２月より開始することとなった。

調査経過

当該地は、平安京右京三条一坊十町に相当し、西が西櫛司小路、東が皇嘉門大路、北が押小路、南が三条坊門小路に囲まれたところで、調査対象地は十町の南西部に位置し、東三・四行の北六・七門に相当する。

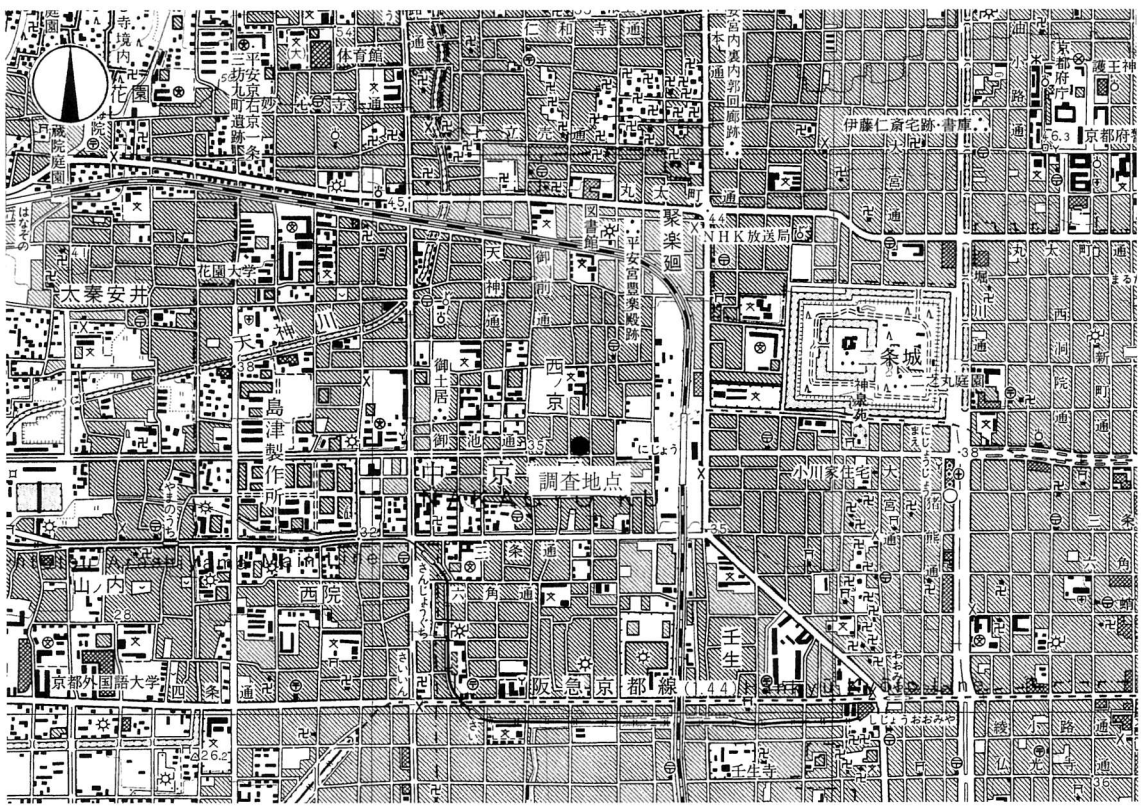


図１　調査地点位置図（1/25,000）

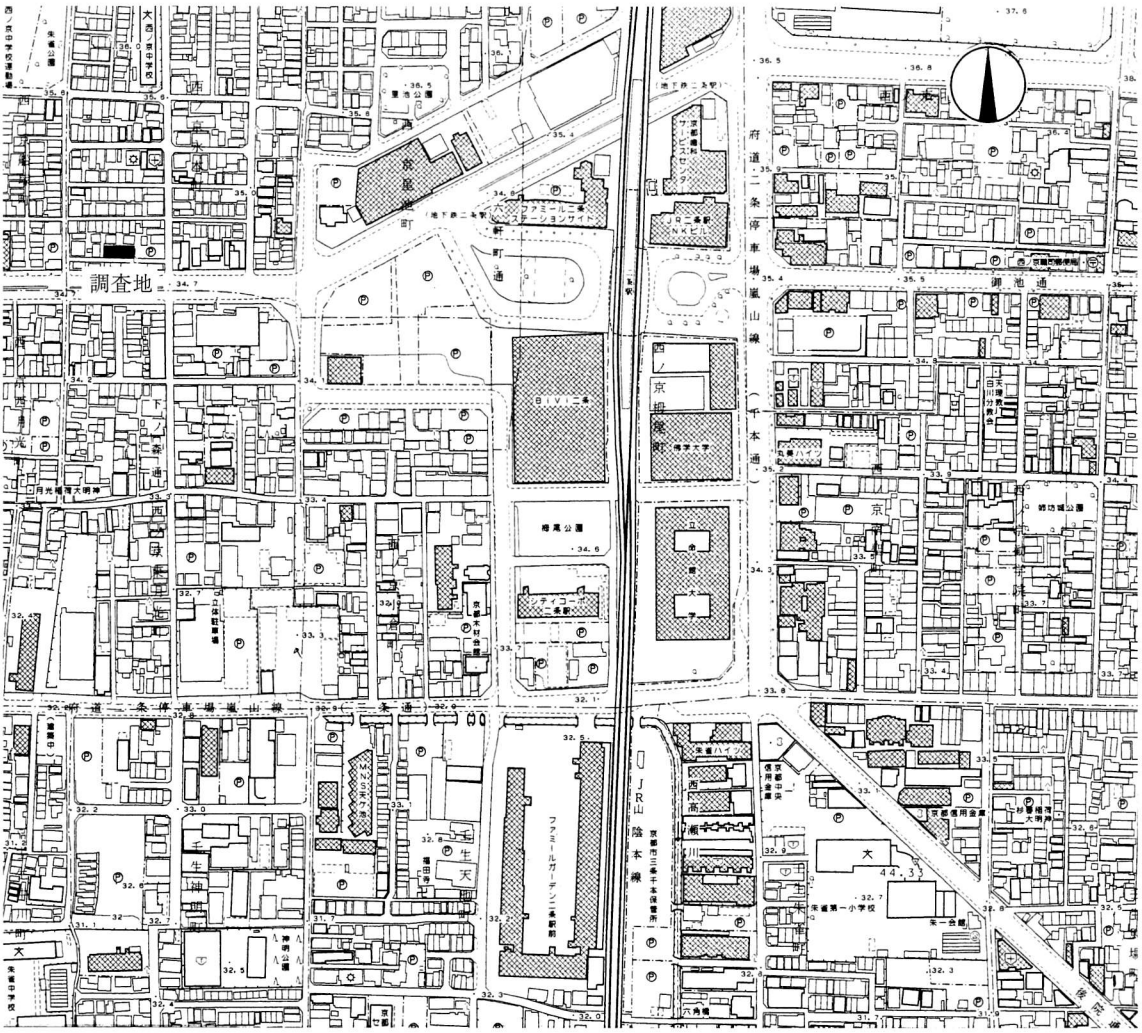


図２　調査地位置図（1/5,000）

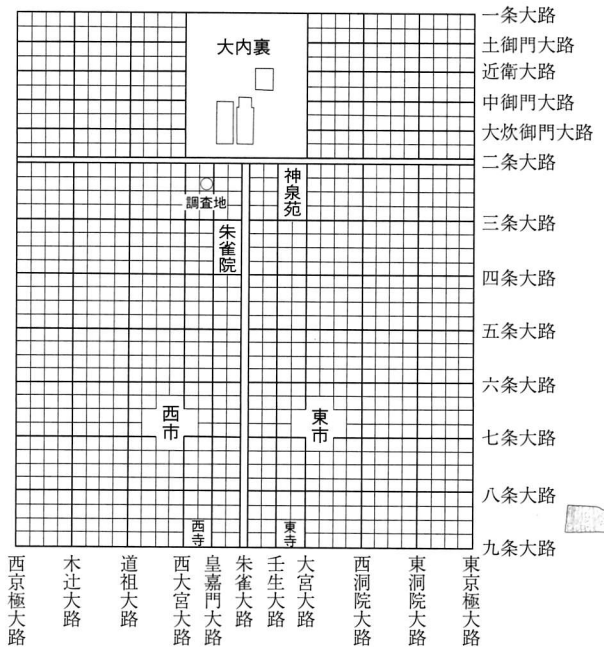


図３　平安京条坊と調査地位置図

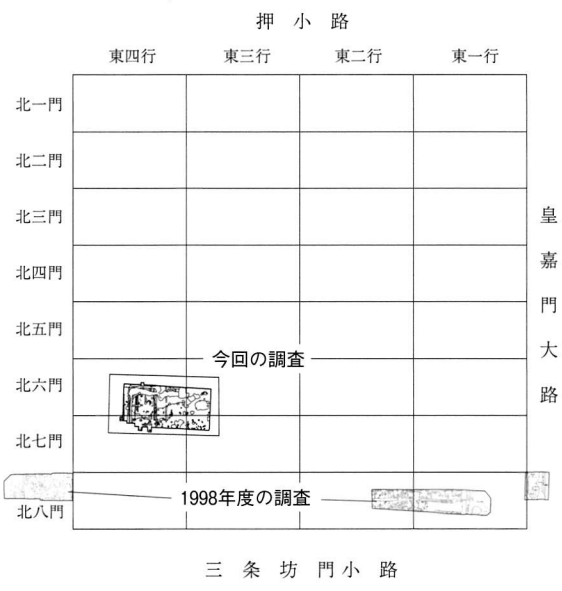


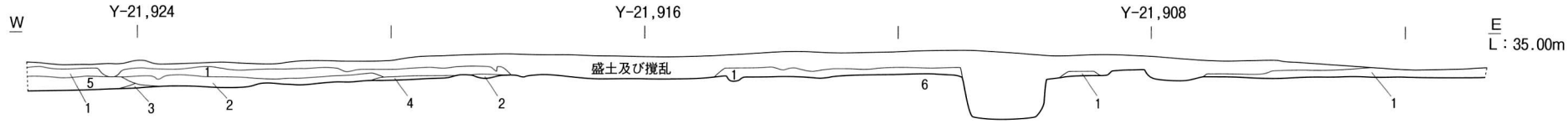
図４　四行八門と調査位置関係図（1/2,000）

この十町は天文古抄本『拾芥抄』によると、「穀倉院」の西隣に位置し、右大臣藤原良相の邸宅跡である「西三条第」（百花亭）の北西隣接地に相当する。二条駅再開発に伴う御池通の拡幅時に十町内において東西２カ所の発掘調査[註1]がおこなわれており、平安時代前期から中期の建物跡が検出されている。今回の調査においても平安時代の建物跡の検出が期待された。

調査は2016年２月８日～３月25日までの間実施した。実際の調査は場内で土置き場を確保するため反転方式でおこなった。最初に西半部からトレンチを開け、西半部の調査を終えたのち東半部の調査をおこなった。調査面積は拡張区を含め254㎡であった。

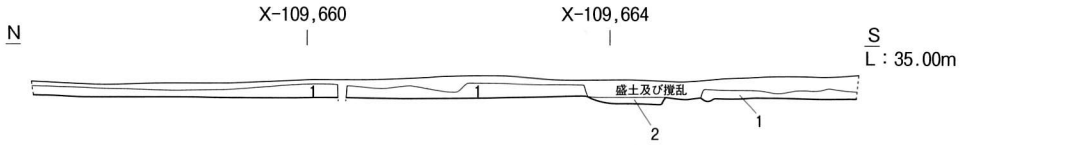
調査の方法としては、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（X=－109,652m、Y=－21,900m）とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、４ｍメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十町における築地四隅の座標値（新測地系）は次のとおりである。

北西	X=－109,574.47m	北東	X=－109,573.99m
	Y=－ 23,039.60m		Y=－ 23,820.21m
南西	X=－109,693.86m	南東	X=－109,693.37m
	Y=－ 23,939.11m		Y=－ 23,819.72m



1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（耕土）
2　10YR4/4褐色砂泥＋10YR6/4にぶい黄橙色砂泥（溝14）
3　10YR6/4にぶい黄橙色砂泥
4　10YR5/6黄褐色砂泥
5　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（土壙13）
6　10YR7/8黄橙色砂泥（地山）

図５　北壁断面実測図（1/100）



1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（耕土）
2　10YR5/6黄褐色砂泥

図６　東壁断面実測図（1/100）

Ⅱ 遺　　構

調査地は盛土が0.2～0.3mあり、その下に耕作土が0.2m前後の厚さで部分的に残存し、以下多量の礫混じり（1～20cm）の褐色砂泥（10YR4/6）層となる。この褐色砂泥層の上面において平安時代の遺構群及び中世以降の耕作に伴う溝跡を検出した。

遺構には平安時代から江戸時代のものがあり、遺構の種類としては、平安時代前期から中期の掘立柱群、土壙跡、鎌倉時代から江戸時代の耕作に伴う溝跡などがある。遺構総数は159基であった。

平安時代の遺構

調査区全域において平安時代前期から中期の掘立柱跡を検出した。一部の柱跡を除き遺構の深さは浅く、敷地全体が既存建物により削平を受けていることが判明した。

建物１（図版１・２の１・３の１・４・図７・８）

調査区南西隅部に位置する。掘立柱建物跡である。東西３間、南北１間分確認した。建物は調査区外に延びるため全形は知り得ない。東西の柱間は2.4m（８尺）の等間で、南北の柱間も2.4mを測る。柱穴は径0.6m前後のやや方形に近い平面をもち、深さは0.25m程残存する。建物は東四行北七門に位置し、おそらく東西棟とみられる。建物の軸線はやや東に振っている。出土遺物はいずれも細片で図化するまでには至らなかったが、柱穴72から10世紀前半の特徴をもつ土師器皿片が出土している。

柵２～７（図版１・２・５・図７・９～14・16）

柵２・３は調査区中央部に位置する。柵２は柱間2.25mを測り、３間分検出した。当初北側に一間分延び、建物跡と考えたが、東西の柵列と判断した。柱穴は径0.3cm前後の円径を呈し、残存深0.1～0.2mを測る。柵３は柵２の北側に接するような位置にある。柱間はほぼ各2.1m（７尺）を測り、５間分検出した。柱穴は径0.2～0.3mの円形を呈し、残存深0.2m前後を測る。柵２と柵３は柱穴の位置関係より作り替えの関係にあると考えられる。柵２はほぼ真東西であるが、柵３はやや東に振れる。柵４～７は対となる柱穴と判断して各１間分のみだが柵として命名した。それらの内、柵４は南北方向の柱列で、柱間2.5mを測る。おそらく北側に延びるが、現代攪乱のため不明である。柵５・６は東に強く振れる。柵６の柱穴89の掘形からは比較的大きな土師器皿片を検出した。柵７はほぼ真東西である。柵６・７は径0.4mの比較的大きめの円形の掘形をもつ。

土壙120（図版５の２・６・図７・17）

調査区東端中央に位置する。東西長4.0m以上、南北長2.5m、深さ0.1mの楕円形の浅い土壙を検出した。埋土は黒褐色（10YR3/2）砂泥層を呈し、少量の土器、布目瓦片と共に木片が出土している。この土壙跡は園池遺構の可能性がある。

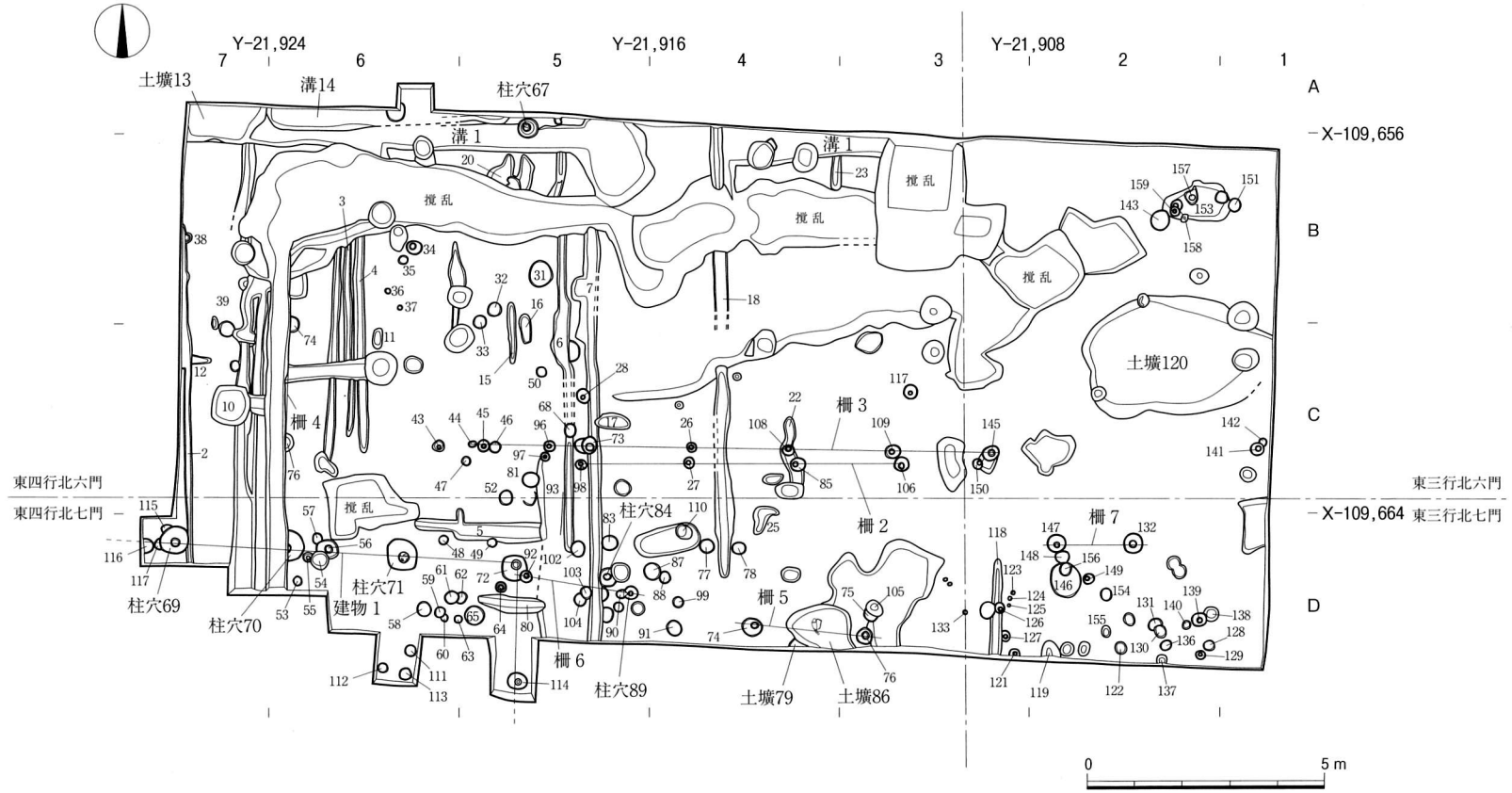


図 7　遺構実測図（1/150）

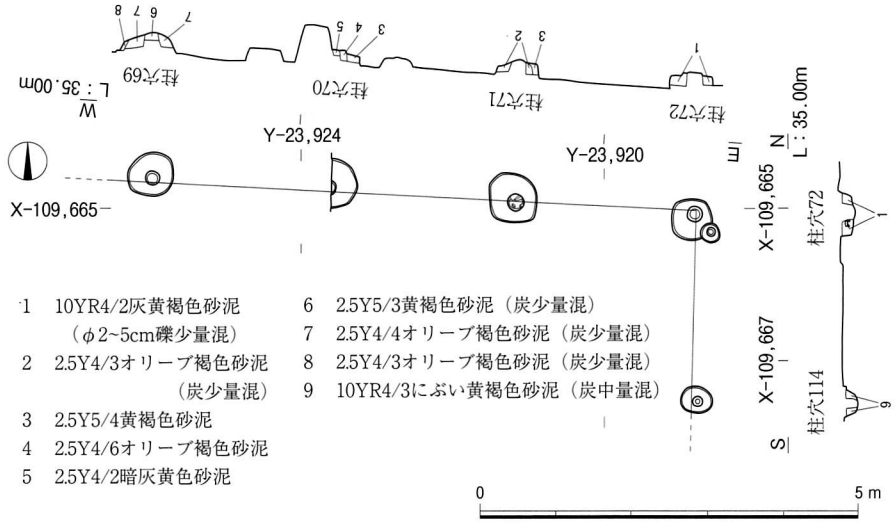


図８　建物１実測図（1/100）

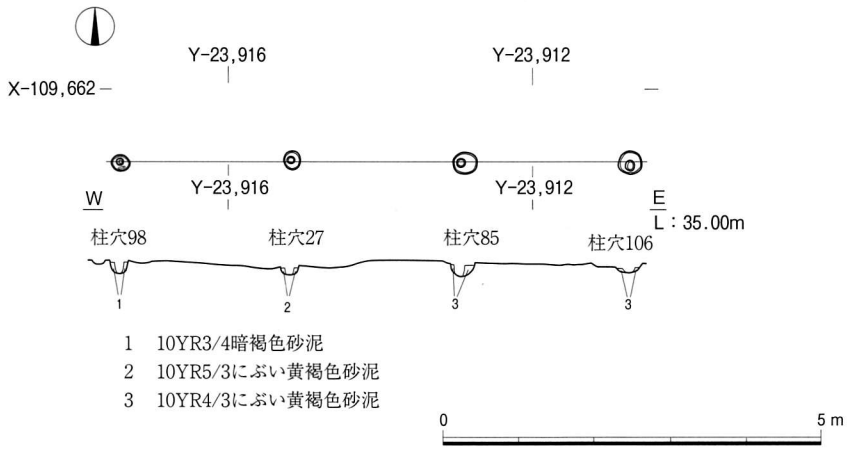


図９　柵２実測図（1/100）

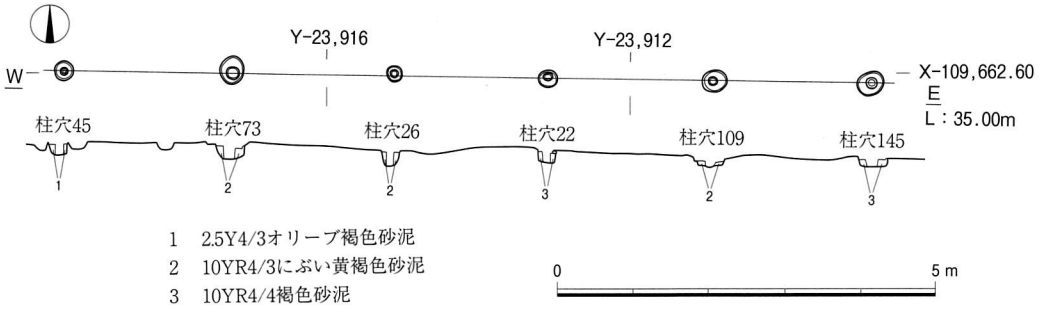


図10　柵３実測図（1/100）

土壙79・86（図版２の２・図７）

調査区中央南端部に位置する。土壙79と土壙86は切り合い関係にあり、土壙79が新しい。土壙79は東西長1.4m以上、南北長は0.23m以上、深さ0.1mを測る。調査区外に延び全形不明。土壙86は東西長1.4m、南北長1.0m程で、深さ0.1mを測る。

土壙153（図版５の２・図７）

調査区東北隅部に位置する。東西長1.4m、南北長0.8mの楕円形の掘形をもち、深さ0.15mを測る。埋土は褐色（10YR4/4）砂泥層で、少量の土師器皿片が出土している。

鎌倉時代から江戸時代

土壙13（図版１・図７）

調査区西北角部に位置する。東西長1.6m以上、南北長0.8m以上、深さ0.25mの規模をもつ。調査区外に延び全形は不明。室町時代とみられる白磁片が出土している。

溝93（図版１・２の１・図７）

調査区中央西よりのやや南に位置する。南北溝である。幅0.6m残存長3.8m以上、南の調査区外に延びる。深さ0.1mを測る。建物１の東側に位置する。区画溝とみられる。

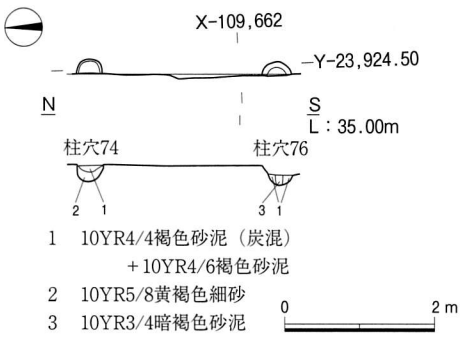


図11　柵４実測図（1/100）

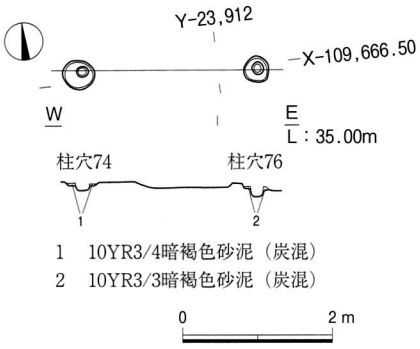


図12　柵５実測図（1/100）

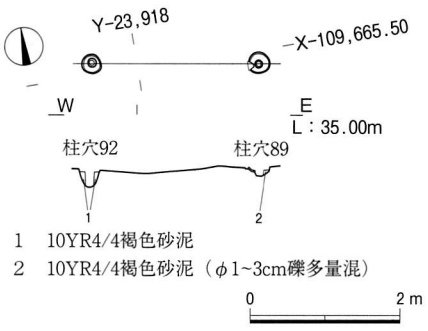


図13　柵６実測図（1/100）

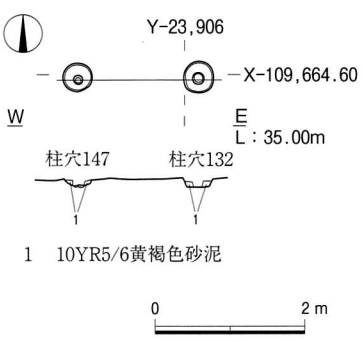


図14　柵７実測図（1/100）

溝1～7・18・22・23・80・118・119（図版1・5・図7）

いずれも耕作に伴う溝である。江戸時代のものとみられる。

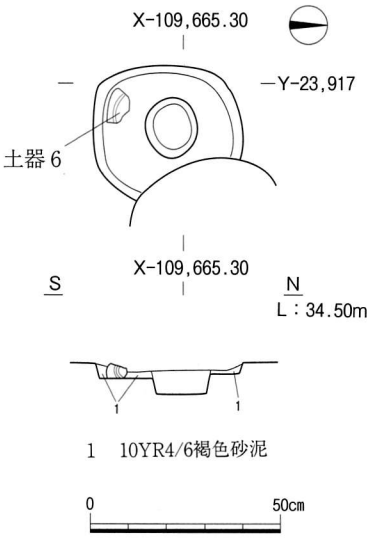


図15　柱穴84実測図（1/20）

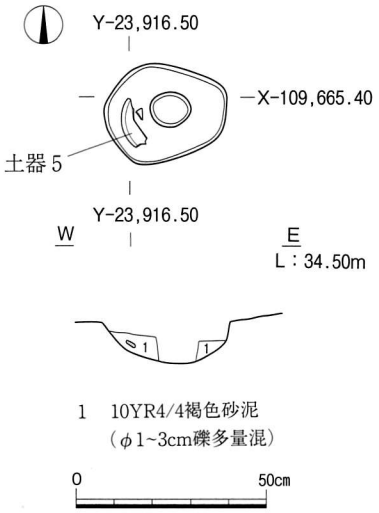


図16　柱穴89（柵6）実測図（1/20）

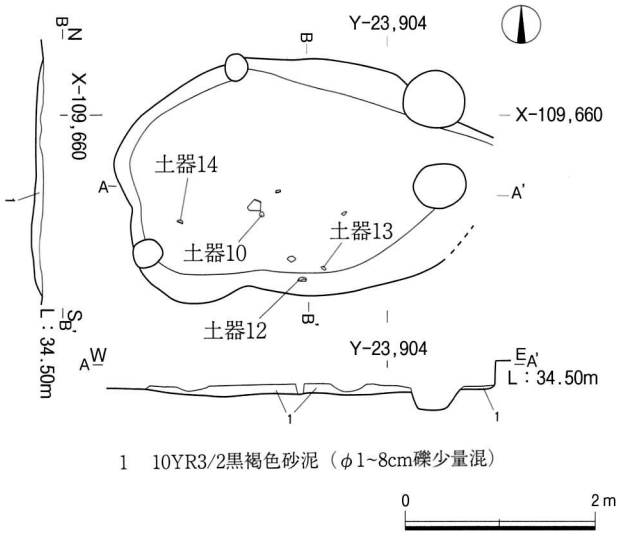


図17　土壙120実測図（1/80）

Ⅲ　遺　　物

各遺構などから出土した遺物は整理箱に９箱ある。時代は平安時代のものが大半で、その他に中世から江戸時代のものがある。遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、銭貨などがある。出土遺物の大半は小片、細片のものが多く図化するまでに至らないものが多い。ここでは図化できるものをできる限り表示することにした。なお、時代区分は平安京の土器編年[註2]に準じた。

土器・陶磁器類

精査中出土土器（図版７・８・図18・19）

土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などがある。土師器皿（１）は口径11cmを測る。10世紀代のⅢ期の特徴を有する。灰釉陶器椀（８）は底部外面に糸切りの痕跡が認められる。胎土は灰白色を呈する。泥面子（17）は径３cmを測る。

土壙79出土土器（図18）

土師器のみ出土。皿（２）は口径12cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、Ⅲ期の特徴を有する。

柱穴149出土土器（図18)

土師器、黒色土器がある。土師器皿（３）は口径16cmを測る。器壁はきわめて薄く、Ⅲ期の特徴を有する。

柱穴42（柵４）出土土器（図18）

土師器皿（４）は口径16.4cmを測る。口縁部は屈曲し、口縁端部は肥厚する。10世紀後半の特徴を有する。

柱穴89（柵６）出土土器（図版８・図18）

土師器皿（５）は口径16.6cmを測る。胎土は白色微砂粒を含み、器壁は薄い。10世紀中頃から後半の特徴を有する。

柱穴84出土土器（図版７・図18）

掘形より緑釉陶器皿（６）一点のみ出土。内外面を丁寧に磨く。釉薬は黄緑色を呈し、胎土は硬質だが焼きが甘い。底部内外面に三叉トチン痕が残る。

溝93出土土器（図18）

土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器などがある。緑釉陶器椀（７）は口縁部内外面に磨きが認められる。口縁端部が外反し、釉薬はほとんど剥がれている。硬質である。

溝７出土土器（図版８・図18）

９は緑釉で施釉されたミニチュアの小椀である。口径3.2cm、器高1.4cmを測る。胎土は軟質で、内面全体と口縁部外面の一部を施釉する。江戸時代のものである。

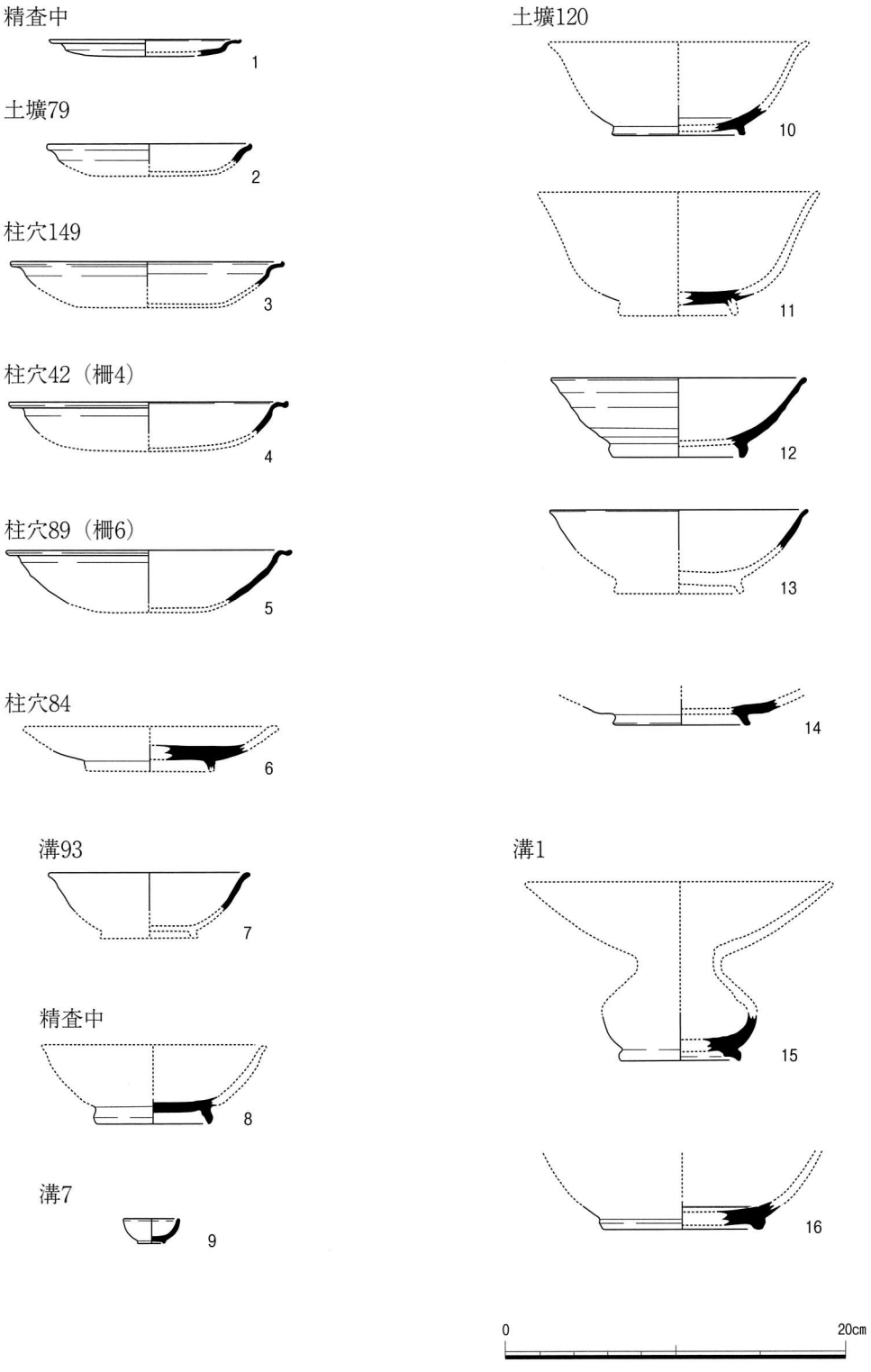


図18　出土土器実測図（1/4）

土壙120出土土器（図版７・図18）

土師器、須恵器、緑釉陶器椀（10、11）、灰釉陶器椀（12～14）などがある。10は内外面丁寧に磨く。釉は薄い緑灰色を呈し、胎土は緻密で硬質である。11は釉は黄緑色を呈し、胎土は硬質である。12は口縁及び体部の内外面を施釉する。胎土は微砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。13は口縁部片、内外面を施釉する。胎土は淡灰色を呈する。14は皿あるいは蓋である。胎土は白色微砂粒を多く含み、青灰色を呈する。内面は滑らかになっており、硯に転用した可能性がある。

溝１出土土器（図版７・図18）

土師器、須恵器、緑釉陶器（15、16）、灰釉陶器、染付などがある。15は緑釉陶器の唾壺であろう。体部は下方に張りをもち、高台はやや幅広く、踏ん張る形態を呈する。内外面全体を緑色の釉を施すがほぼ剥離している。胎土は灰色を呈し、硬質である。越州窯青磁の模倣である。16は緑釉陶器椀、釉は暗緑色を呈し、胎土は暗灰色を呈し、硬質である。

瓦　　類

平　瓦（図版８・図20）

18は柵２の柱穴98掘形出土。縄目タタキ明瞭に残る。胎土は白色砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。19は土壙86出土。厚さ1.6cmと比較的薄い。胎土は微砂粒を多く含み、淡灰色を呈する。20・21は建物１の柱穴71出土。厚さ２cmを測り、胎土は白色微砂粒を少量含み、淡灰色、表面は黒灰色を呈する。

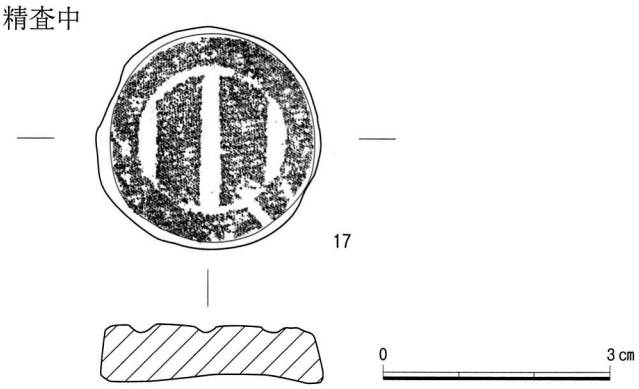


図19　土製品実測・拓影図（1/1）

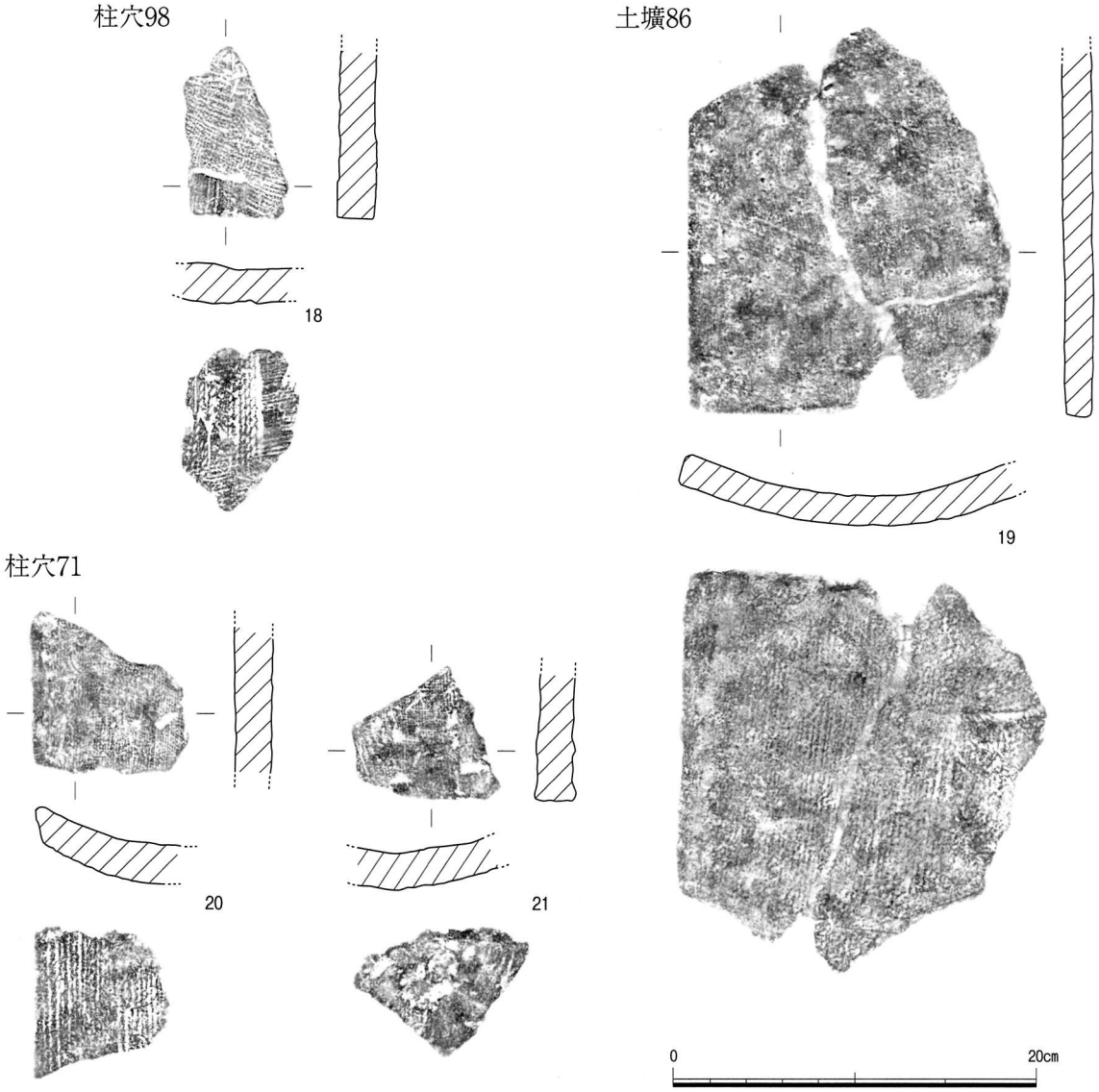


図20　平瓦実測・拓影図（1/4）

Ⅳ　まとめ

今回の調査においては平安時代中期を中心とする掘立柱跡を多数検出した。10世紀代の掘立柱建物跡をはじめ柵列群、土壙跡などがある。しかし、いずれも遺構の深さが0.1～0.3mと浅く、敷地全域において平安時代の遺構群が削平を受けていることも判明した。その中で建物１は柱穴の径が0.6mと比較的大きな掘形をもち、十町の東四行北七門に位置する。建物１は調査区外に延びていくため全形は知り得ないが、おそらく東西棟の建物跡とみられる。建物１の北側にある東西方向の柵３は建物１に伴う柵列の可能性がある。調査区の東部で検出した土壙120は、東三行北六門の西南隅部付近に位置し、埋土の堆積状況などから池跡の残欠とも考えられ、十町における園池の一部を構成する可能性がある。

この十町は天文古抄本『拾芥抄』によれば、書き入れが無く空白地となっているが、東隣に南北二町を占める『穀倉院[註3]』があり、『穀倉院』の南には藤原良相の『西三条第（百花亭）』がある。また、この地は大内裏の南端より二町目という平安京の中心部に位置することなどから、官地であった可能性は高く、何らかの重要な施設があったものと考えられる。

今回出土した土器類の中に、特筆すべきものとして緑釉陶器の唾壺（15）がある。平安京跡における唾壺の出土例は少なく、西市[註4]などが知られるが、武蔵国分寺跡や上総国分寺跡[註5]などからも緑釉陶器唾壺が出土している。また平城京跡においては緑釉陶器の唾壺と共に唐から招来された越州窯系唾壺[註6]が出土している。国内出土の緑釉陶器の唾壺は越州窯系唾壺を模倣したものである。このような唾壺を所有することができた身分のものは公家や高級貴族、あるいは官寺などに限られ、当十町の住人がそのような高位のものであると想定される。

以上今回の調査においては平安時代の掘立柱跡を多数検出することができた。1998年度に二条駅再開発に伴う御池通り拡幅工事に伴っておこなわれた発掘調査[註7]においても平安時代の掘立柱群を多数検出しており、今後さらに十町全域の調査が進展すれば文献史料の空白を埋める新たな成果が得られるものと期待される。

註１　「平安京右京三条一坊２」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2000年。

註２　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

註３　「令下官の一つ。平安時代初期に、米穀の収納を行う貯蔵庫として成立したが、次第に内蔵寮と並ぶ内廷経済の中心的官司に発展し、平安時代後期に至ってその機能が停止した。」『国史大辞典』吉川弘文館　1985年。

註４　『平安京跡発掘資料選』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　1980年。

註５　『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館　1998年。

註６　『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館　1978年。

註７　註１と同じ。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょういちぼうじゅっちょう
書　　名	平安京右京三条一坊十町
副 書 名	西ノ京永本町の調査
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	家崎孝治
編集機関	古代文化調査会
所 在 地	〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中１丁目４番地125-1404
発行年月日	2016年８月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょういちぼう 三条一坊 じゅっちょうあと 十町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょう 西ノ京 ながもとちょう 永本町23番	26100	1	35度 00分 40秒	135度 44分 16秒	2016.02.08 ～ 2016.03.25	254㎡	ホテル建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京 三条一坊 十町跡	都城跡	平安時代 ・ 室町時代 ～ 江戸時代	溝、土壙、柱穴 溝、土壙	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類	平安時代中期の掘立柱建物、柵列

	Aランク点数（箱数）	内　　訳	Bランク（箱数）	Cランク（箱数）	出土箱数合計
点数及び箱数	21点 （１箱）	土師器５点、緑釉陶器７点、灰釉陶器４点、平瓦４点、土製品１点	９箱	0	10箱

図　　版

1　調査地遠景（東から）

2　西半部全景（東から）

1　建物１（東から）

2　土壙86（北東から）

1　柱穴71（建物１）（北から）

2　柱穴84緑釉陶器出土状況（東から）

1　柱穴114（建物１）（北から）

2　柱穴69（建物１）（東から）

1　東半部遠景（北から）

2　東半部全景（北から）

1　土壙120（南西から）

2　土壙120灰釉陶器（土器12）出土状況（北西から）

6

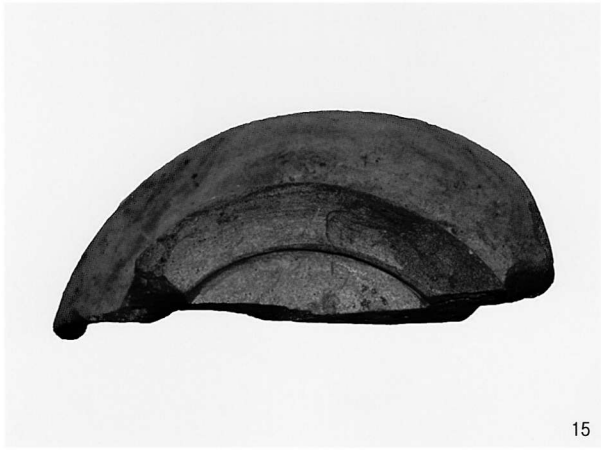
8

10

11

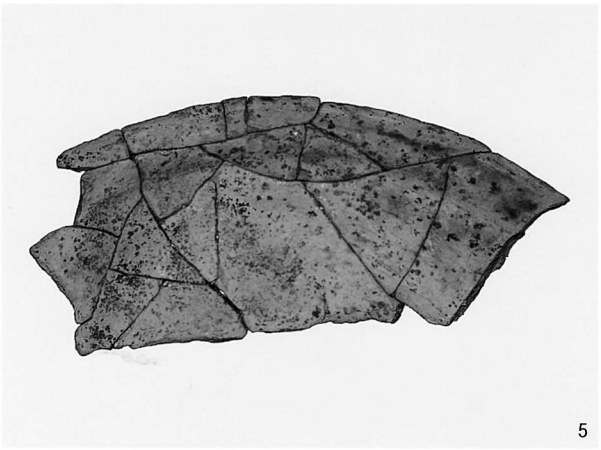
12

14


15

16

柱穴84（6）・精査中（8）・土壙120（10・11・12・14）・溝1（5・16）出土遺物


5

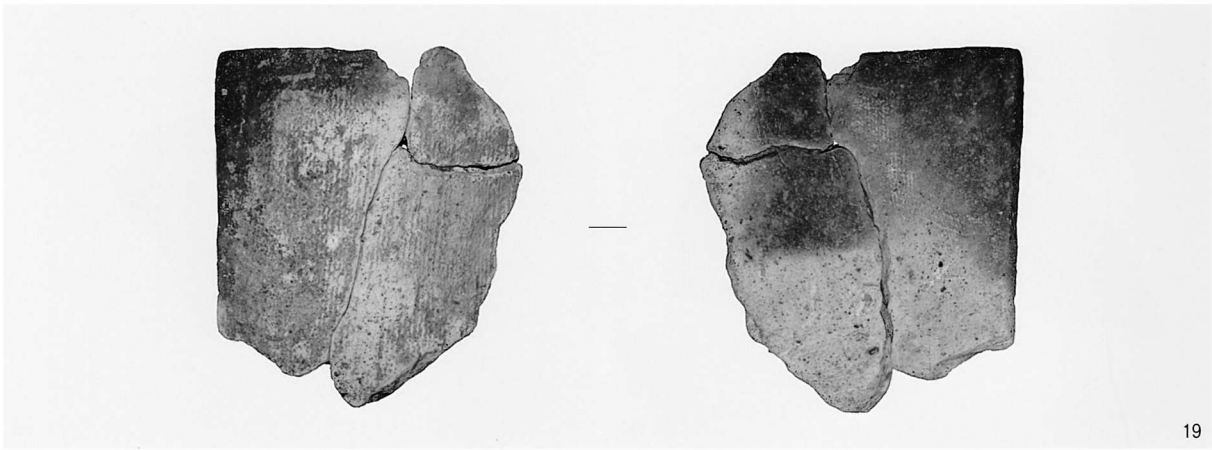
9

17

18

20

21


19

柱穴89（5）・溝7（9）・精査中（17）・柱穴98（18）・71（20・21）・土壙86（19）出土遺物

平安京右京三条一坊十町

—西ノ京永本町の調査—

発行日　2016年8月31日

編集
発行　古代文化調査会

住所　〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL　(078)857-6368

印刷　真陽社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　(075)351-6034